

Title	ICT 活用力が LD 児の自己肯定感に与える影響の調査
Author(s)	竹田, 和輝
Citation	
Issue Date	2025-03
Type	Thesis or Dissertation
Text version	author
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10119/19778">http://hdl.handle.net/10119/19778</a>
Rights	
Description	Supervisor: 池田 満, 先端科学技術研究科, 修士 (知識科学)

## ICT 活用力が LD 児の自己肯定感に与える影響の調査

2020110 竹田 和輝

本研究の背景として学習障害(LD)を持つ児童生徒がその「読み」「書き」などの困難から学習の定着に障壁があるだけでなく、他児が日常的に行っていることが自身にはできなと感じ、その不全感から自己肯定感が低下し、不登校状態になるという状況がある。LD 児の「読み」「書き」の困難に対して ICT 機器を活用した学習補助が有効であることが先行研究から示されている。この困難を有する能力を ICT 機器などの補助具によって代替する方法論を代替的アプローチと言う。このような代替的アプローチとしての LD 児の個のニーズに応じた ICT 機器の活用には、学校長などによる合理的配慮として認められる必要がある。

一方、学校での一斉指導では ICT 機器の活用の推進が盛んに取り上げられ提示資料や提出物などを電子化し、GIGA スクール構想の推進によって導入された一人一台端末を活用した授業が展開されている。しかし、教員の ICT 機器活用の技量不足や ICT 機器を活用した学習への疑念から授業において ICT 機器を活用することに積極的ではない場合も少なくない。LD 児に対して合理的配慮としての ICT 機器の活用を認める立場の教員が、ICT 機器を活用することに意欲が弱い場合、機器の維持に関する不安や学習効果への疑念からその配慮を認めないことも多い。筆者は ICT 機器を活用した学習の方法を教える私塾 SN ラボでアシスタントティーチャーとして授業設計や授業者として参加している。SN ラボは LD 児の「読み」「書き」などの困難を軽減する ICT 機器の学習上の活用法の指導や LD 児同士の交流の場となっている。

小中学生を対象とした自己肯定感に関する先行研究は、数は少ないものの行われている。その定義や計測手法はそれぞれの研究によって異なり、複数の尺度が存在する。

本研究では自己肯定感を特別支援教育大事典より”ありのままの自分を受け止め、自己の否定的な側面もふくめて、自分が自分であっても大丈夫という感覚”と言う定義を用いている。この定義を本研究の要素を含めて言い換えると、「読み」「書き」の困難と言う自己の否定的な側面を受け入れ、その困難を軽減する ICT 機器を活用する学習方法を会得することで、ICT 機器を活用した学習方法を含めた自分自身の状態を大丈夫だと前向きに捉えることができると言える。これは SN ラボで ICT 機器を活用した学習方法を会得した生徒たちとの授業での成果物ややり取りの中で観察された様子を基にしている。SN ラボの生徒たちは入塾当初は学習上の困難から学習に対する不全感を持ち、自信と意欲を失い、自分自身全体の自信もない様子がある。しかし、ICT 機器を活用して「読み」「書き」の困難を軽減できることを知り、その方法を会得することで徐々に自信を取り戻し、学習に意欲的に取り組み始めるように変化する。この様子から LD 児が ICT 機器を活用した学習方法を会得することは、単に学習上の困難を軽減し、学業成績が向上するだけでなく、自己肯定感を向上させることにも影響をもたらすと考えたことが、本研究の出発点である。現在学校現場や先行研究で議論される、LD 児への合理的配慮としての ICT 機器の活用を認めるための根拠は、学業成績の向上が主なものであり、自己肯定感に着目することは少ない。本研究は ICT 機器を活用して「読み」「書き」の困難を軽減する方法を会得することが自己肯定感の向上に好影響をもたらすことを示し、自己肯定感の向上を合理的配慮の根拠として捉えるための一助としたい。

調査手法は、SN ラボに通塾する生徒の保護者 3 名を対象とした聞き取り調査である。質

問内容は、観察から得られた自己肯定感が向上したと捉えられる状況から抽出した 8 項目を基に、10 問の質問を設定した。3 名の回答から LD 児が「読み」「書き」の困難を軽減する ICT 機器の活用方法を会得することで学習に対して意欲を持ち、自分なりに新しい ICT 機器の活用方法を模索したり、継続的に学習に取り組んだりすることが分かった。また、ICT 機器を活用した学習方法は LD 児自身に必要だと感じ、ICT 機器を活用した学習が盛んな高校への進学を希望するという前向きに希望を述べるという回答もあった。他児や教員に ICT 機器の活用が認められないのではないかと不安に感じることもあるが、教員や保護者と相談したり事前に学級内で ICT 機器の活用の意義を説明したりして ICT 機器を活用できる状況を整える工夫も見られた。3 名の回答に共通する点の一つとして誤りを指摘された際に修正に取り組むことに時間がかかる点がある。指摘を助言と受け取らず、否定されたと感じ修正に取り組むことができないなどの理由があるようだが、時間経過とともに修正に取り組むことができる状態は、ありのままの自分を受け入れ、修正することで自分は大丈夫だと感じていると捉えることができ、これは自己肯定感の向上だと捉えている。LD 児が「読み」「書き」の困難を軽減する ICT 機器を活用した学習方法を会得することは自己肯定感に好影響をもたらし、学習に対する意欲を向上させるだけでなく、自分は大丈夫だと安心することができ、将来に対しての希望をもたらすと言える。